

旬花報

19号

発行 2021.3.31

群馬県立女子大学
同窓会事務局

〒370-1193
佐波郡玉村町上之手1395-1
TEL: 0270-65-8511
URL: http://shiou-kai.com/



同窓会長
野村 留美子

新型コロナウイルスの影響で大変な状況ではございますが、同窓生の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

生活が一変し、不便な生活様式を強いられるとともに、人と躊躇なく接し、語らうことのできた日々がどれほど有難いものであったかを、改めて感じさせるような毎日となりました。

同窓会活動では、幹事会・総会、大学祭での同窓会カフェの出店、そしてオンラインピックイヤーに合わせた四年に一度の懇親会など、今年度予定していたすべての行事を中止にせざるを得ませんでした。ただ、残念ではありません。しかし、このような厳しい状況下でも、学生の活躍は目覚ましく、紫桜賞にも多くの応募があったことを本当に嬉しく思います。

今年度は甲乙つけがたく、厳正な審査の結果、複数の受賞となりました。

学生の頑張りにつけたいように、私たちも今できることから力を尽くしてまいります。

卒業生の皆様には、これからも学生のために変わらぬご支援、ご協力をお願いいたします。この状況が一日も早く終息に向かい、平穏な日々が戻りますことを心から願っております。

紫桜賞

国際コミュニケーション学部・ビジネス課程四年
大屋 咲良 さん

大屋咲良さんは、「第四九回全書芸展」の公募部門・漢字の部で、東京都知事賞を受賞されました。公募部門は全国の高校生以上が対象で、五十一人の作品が寄せられました。

大屋さんの作品は、漢字の書体の一つである隸書体で記された中国の歴史的資料「曹全碑」を、縦百三十六センチ、横七十センチの紺紙に金泥で臨書したものです。乱れることなく最後まで書き上げた力量が審査員に評価されました。

大屋さんが書道を始めたのは県立女子大・書道部に入学してからで、書道歴は浅いものの、部長を務め、日頃の練習を重ね努力を続けた結果、最高賞に次ぐ東京都知事賞受賞という快挙を成し遂げました。



紫桜賞

群馬ガールズ

群馬で過ごすメンバーの日常や群馬県内の飲食店や観光スポットを、写真や動画で投稿しているインスタグラムのフォロワー数は、過去一年で約二千五百人。アカウントの運用にあたっては、コメント、ターゲット、写真の加工や投稿の仕方などメンバーと話し合いながら行い、写真やデザイン、文章まで一つ一つ丁寧に考えて制作しています。

群馬県がより身近な存在になるよう、今後も地域の方々と協力して、群馬の魅力を最大限に発信することが今後のさらなる目標です。

群馬ガールズは、二〇一九年後期に開講された山本一太群馬県知事による特別講義にて「群馬県の広報を学生が担当すると面白そう」という意見をきっかけに同年十一月に発足され、学生ならではの視点とアイデアで群馬の魅力を発信している群馬県公認の学生団体です。

メンバーは有志で集まった十六名で、「群馬に映え革命を起こそう」というビジョンのもと、若者をターゲットに若者主導で群馬の魅力を発信することを目標にして、SNSでの群馬広報活動や、地域の方々と協力して群馬を盛り上げる活動を行っています。



紫桜賞

アロハダンスサークル

アロハダンスサークルは今年で創部十二年を迎えます。

現在部員二十六名で活動しています。

コロナ禍の中でも、大学講堂や体育館などの練習できる環境で、感染症対策を講じながら、日夜練習に励んできました。

昨年十二月に行われたカレッジフライングコンペティション(二〇二〇)では、団体部門で優勝、ソロ部門でも三年の萩原あかりさんが優勝し、ミス・カレッジフライングに輝きました。また、曲の歴史や背景、曲の解釈と衣装との関連性等をまとめるファクトシートでも団体部門とソロ部門共に最優秀賞を受賞しました。

さらに、四年の神立春香さんは、このコンペティションにゲストとして招待され、ミス・カレッジフライング二〇一九としてのラストパフォーマンスを披露しました。



学生活動支援金

県立女子大では開学四十周年を迎え、コロナ禍にある学生の支援のために寄付を募っています。紫桜会では、今年度三十万円を支援いたしました。

卒業一年目の日常

昨年来の新型コロナウイルスの影響で、私たちの日常はすっかり様変わりしてしまいました。しかし、そのような中でも、学業を進め、就職先も決めているかなければならない学生の皆さんは、大変な思いをしていることと思います。

今回は、卒業一年目のAさん（公立学校教員）にアンケートを送り、回答をいただきました。大学から新しい生活に一步踏み出した卒業生の日常をお知らせしたいと思います。



Q 学生のころ思い描いていた生活は、どんなものでしたか？

A 正直、自分が本当に教員になってよいものが、不安もありました。でも、子どもたちに囲まれ、同僚や先輩方と出会い、色々な行事を経験して、忙しくも充実した生活が送れると思っていました。

Q 新学期早々に休校になってしまいましたね。そのころはどんな生活をしていましたか？

A （三月から続いていた休校ですが）始業式は通常通り行われました。しかし、子どもたちと二日間過ごした後、また休校になりました。たったの二日でしたが、本当にあつという間に一日が終わってしまい、自分が何をすべきで、そのうちの何が終わっているのか全く分かりませんでした。休校中は教材研究を行っていましたが、児童の反応が全く想像できず、思うようには進みませんでした。

Q 一年を振り返って、大変だったことを教えてください。

A 一つ目は、休校明けの児童の対応です。児童の中には、集団での学習が難しい子や感情コントロールが難しい子など、いろいろな配慮が必要な子がいます。一人一人に対して、どのように対応したらよいか悩みました。数十人の子どものがいると、子ども一人一人の様子を見て対応することは難しく、心に余裕がなくなることもありました。

二つ目に毎日の丸付けです。特にノート類は、時間に追われてしまい、大変でした。プリント類も、油断するとすぐにたまってしまい、後で自

分の首を絞めてしまうことになりました。三つ目は成績の評価です。テストなどで点数化できるものはいいのですが、点数化できないものは私自身のものさしで判断することになります。自分の判断が正しいのかどうか、常に不安を感じていました。

Q 反対に、楽しかったことは何ですか？

A 一つ目は、日々の子どもの成長を見られることです。なかなか話を聞けなかった児童が、すっかり座って話を聞けるようになったり、今までできなかったことができるようになったりすると、素直に「子どもってすごいな、面白いな」と思えます。

二つ目に子どもたちの行動です。急に変顔をしたり、全力で物真似をしたり：一緒にいると、自然に笑顔になってしまいます。自分にもそういうところがあったのに、大人になると忘れてしまっんだな、と思いました。

三つ目は、他の先生と話をすることです。子どもたちの指導で悩んだときには助言をいただいで救いになることもあります。また、他愛のない話でも、安心したり共感したり、仕事をする上での心の支えになっています。

Q 想像と現実のギャップはありますか？

A 想像以上に疲労がたまり、想像以上に多忙だと思いました。教育実習は本当に教員の仕事の一部でしかないと感じましたし、「自分はできるかも」という考えは甘かったと思いました。また、教材研究の大切さを実感しています。十分に準備できた授業は子どもの反応がいいし、準備に時間をかけられなかった授業は、子どもたちの乗りが良くありません。勉強を楽しいと思ってもらうためには、自分が勉強をしないといけないと感じました。

新たな生活が始まると、想像していたことや不安点もたくさんあることと思います。Aさんの話の中で、「他の先生との会話が支えになった」という言葉が印象に残りました。どここの世界に行っても、身近な人という関係を築いていきたいですね。

編集後記

「ソーシャルディスタンス」からの「フィジカルディスタンス」、「三密」、「黙食」など、1年前には聞いたこともなかった言葉が、当たり前の日常になりました。大学でもオンライン授業が普及し、課題に迫られる日々かと推察します。同窓会活動も、何一つできない一年でした。

そんな中でも、毎日太陽は昇り、夜になると空には星が輝きます。様変わりした日常の中でも、何かしらの希望を見出せるのが「文系人間」の特権なのかもしれません。

来年の「旬花報」には、面白い話題を載せられることを祈っています。